資料：宮古語大神方言 形容詞重複語幹の機能を中心に

金田 章宏（千葉大学）

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
国語研 令和３年度 第１回オンライン研究発表会「格と形容詞」
（2021 年 6 月 13 日）

はじめに

宮古語大神方言の文法体系を記述する過程の一部として、形容詞語幹の重複形（以下、重複語幹）の用法について確認、整理する。

重複語幹はそのままで述語や修飾語になったり、～nu の形で規定語になったりする。また、補助動詞やコピュラと組み合わさって述語や規定語になる。

名詞をかざる規定語には＜重複語幹 nu＋名詞＞という２単語の組み合わせのほかに３単語の組み合わせがあり、組み合わせのパタンもいくつかみられる。

２単語の組み合わせでは重複語幹が直接名詞をかざり、３単語の組み合わせでは、全体をあらわす名詞の部分（や属性）をあらわす名詞と重複語幹の２単語の組み合わせが全体をあらわす名詞をかざる。その組み合わせには＜重複語幹 nu＋部分＋全体＞、＜部分＋重複語幹 nu＋全体＞のふたつがある。どちらの組み合わせでも、＜重複語幹 nu＋部分＞、＜部分＋重複語幹＞が一次的なまとまりをつくって、全体をあらわす名詞をかざる。

部分をあらわす名詞はハダカ形であらわれることも nu 格であらわれることもあるが、いまのところとくに違いはみられない。

名詞をかざられとするこれらの組み合わせが全体として主語や補語、述語としてはたらく。

語幹：日本語の形容詞重複語幹（長々、青々など）では語幹 stem でいいが、宮古語などでは厳密には語幹・語尾の語幹ではなく、語基 base か。

upu-k-aɿ　大きい
upu-k-ataɿ　大きかった
upu-f naɿ　大きくなる
upu-sa　大きさ（大きくスル）
語基：upu
語幹：upu-k
中止形：upu-f
語尾：aɿ/ataɿ
接辞：sa

宮古語における形容詞の重複語幹の概要

『言語学大辞典セレクション琉球列島の言語』の「宮古方言」では平良地区の方言について説明する。そのなかの重複語幹については以下のとおり。

・「重複法による形」がそのままで述語になったり、～ヌで連体修飾語（＝規定語）になる（２単語の組み合わせ)。
・補助動詞とともに述語形式になり、それが終止、中止、条件形になる。
・「重複法による形」がそのままで副詞としてはたらく。＝修飾語
・スル（ナス)、ナルとくみあわさる。
・用言である。
（・単語幹で連体修飾語＝規定語になる。)

この発表では重複語幹のこのほかの用法を中心に取り上げる。

・＜重複語幹 nu＋部分＋全体＞などの３単語の組み合わせがある。
　・単語幹の組み合わせにもおなじ３単語の組み合わせがある。
・ふたまた述語文の先行する述語になる。
・単独で（または補助動詞とともに）従属節＝条件節になる。

重複語幹は形容詞語幹の繰り返しによって作られるが、そのさい、前要素の短母音が長音化することが多い。語彙によって長音化が義務的なものもあるようだが、長音化が任意のものも少なくない。長音化した場合としない場合とでは、長音化した場合のほうが強意のニュアンスが生じるようである。前要素が長母音おわりのばあいはそのまま繰り返される。

１．終止用法

大神方言の形容詞の終止用法はカリ型（第一形容詞型）が基本的である。述語以外の文の部分に強調辞 tu があるときは形容詞は kaɿ 形をとり、それがないときは kam 形になる。

urikatu imi]kaɿ.これが小さい。
urikatu] jarikaɿ.これがだめだ。
umanutu] kakikaɿ.ここがきれいだ。
urikatu suku]rakaɿ.これが塩辛い。

kaɿkam.軽いよ。
u[re:] upukam.　これは大きい。
uri[mai] mmakam.これもおいしいよ。

ure: suku]rakam.これは塩辛い。

カリ型は補助的な単語とともにムード形式を作る。確実性をあらわす kumata は名詞性が強いようで連体形（tu 強調形）である kaɹ 形をとるが、形式名詞だったはずの pakɹ は名詞性が薄れたのか、kaɹ 形でも kam 形でもよい。ベシ由来の pe:m も同様である。

ure:] mmakaɹ] kumata.これはおいしい。
pe:kaɹ] kumata pakɹ.速いはずだ。たぶんあいつは足が。
nivkam] pakɹ.遅いと思う。
urikatu] mmakaɹ] pakɹ.これがおいしいと思う。おいしいハズ。
urimai] mmakam] pe:m.これもおいしいんじゃないかな。おいしいかねえ。
urikatu] mmakaɹ] pe:m.これがおいしいかねえ。おいしく見える。

重複語幹も終止用法に使用される。カリ型と比較して強意的なニュアンスはあるようだが、意識されないことが多いようである。

ure:] imi:imi.これは小さい。
ure:] u[pu:]upu.これは大きい。
ak[ki] ta[ka:]taka.あら、高い！
sukura:]sukura.塩辛い。

重複語幹のムード形式は組み合わせが限定されるようで、カリ型のほうがふつうのようである。（語彙による違いは未確認）

urikatu] imiimi pe:m.これが小さいかなあ。imikaɹ pe:m のほうがいい。
upuupu] pe:m.大きいかなあ。upukam] pe:m のほうがいい。
△urikatu] imiimi pakɹ.これが小さいと思う。いえなくはない。imikaɹ pakɹ がいい。
×imiimi kumata.これは明確に不可。

単語幹と形式名詞 munu との組み合わせによる終止用法がある。

upu] munu.大きい。
urikatu] jari munu.これがだめだ。
u[ma: kaki] munu.ここはきれいだ。場所

重複語幹と形式名詞 munu との組み合わせにも終止用法がある。重複語幹は名詞的な語形なので nu 格をとる。

upu:upunu] munu.大きい。

　重複語幹と補助動詞 uɿ との組み合わせもカリ型や重複語幹とだいたいおなじ意味で使用される。有生性にはかかわらないようだ。

fuccja:] upuupu[tu] uɿ.クジラは大きい。
maru:]marutu uɿ.短い。短くしている。マルマルカーとおなじ。
marumaru]ka:tu uɿ.短い。短くしている。マルーマルとおなじ。

unu pare: [imiimitu] utaɿ.この畑は小さかった。
ki:nu] jusarapinu] tin[na akaakatu utaɿ.きょうの夕日は赤かった。

　重複語幹とコピュラ jaɿ との組み合わせは過去テンスのときに使用されるが、utaɿ のほうがいいようである

imiimitu] jataɿ.小さかった。畑が。
upuuputu] jataɿ.大きかった。ものなどが以前は。
akaakatu] ja[taɿ.赤かった。いまよりも前のほうが。

　重複語幹は補助動詞「ある aɿ」「する asɿ」「なる naɿ」と組み合わさる。

・「ある aɿ」との組み合わせ　痕跡相

重複語幹＋補助動詞 uɿ と「ある aɿ」との組み合わせ

・upuupu uri aɿ
urikatu] upuupu ure:ɿ.これのほうが大きかったハズ。きのう見たものよりも。
ffuffutu] ure:ɿ.黒々としていたようだ。いまはそんなに黒くない。
akaakatu] ure:ɿ.赤かった。いまよりも前のほうが。ure:ɿ はいいが jare:ɿ は不可。

重複語幹＋コピュラ jaɿ と「ある aɿ」との組み合わせ

・upuupu jari aɿ
urikatu upuupu] jare:ɿ.これのほうが大きかったハズ。きのう見たものよりも。これは ure:ɿ よりも簡単な言い方のようだ。

・「する」との組み合わせ

形容詞を動詞化する「～くする」では、重複語幹では本動詞 asɿ と組み合わさる。

mmapi] kupa:ku[pa] a[se:]ri.もっと硬くしてくれ。
mmapi] ffuffu asi.もっと黒くしよう。勧誘
mma[pi] ffuf[fu] asiti.もっと黒くしよう。意志・勧誘
ma:nu] amaama asna.あまり甘くするな。
pispiska:] assu.薄くしろ。強意はありそうだが、あまり意味はない。
kupa:ku]paka: assu.硬くしろ。ka:は意味のない「付け文句」。
upuupu[ka:] a[se:]ri.大きくしてくれ。ka:は意味のない「付け文句」。
upuupuka:[na:] assu.大きくしろ。複数を明示する。×na:ka:
k!isaNkSke:] upuuputu asi.まえよりも大きくした。

a[kaakatu] ase:ɿ.赤くしてある。痕跡相

これの継続相は、「する」が本動詞 asɿ のままだと意志的な動作の意味の継続相になるが、補助動詞 sɿ との組み合わせだと形容詞的な属性的な意味になる。

a[kaakatu] asi:ɿ.赤くしている。意志的な動作

・upuupu si uɿ
ffuffu situ] utaɿ.黒かった。
akaaka si[tu] utaɿ.赤かった。

なお、サ名詞形による「～くする」でも補助動詞 sɿ と組み合わさる。

mmapi] pissa si.もっと薄くしろ。
karikatu] pissa sɿ.あいつが薄くする。
akSsa] si fai.炒めて食べろ。熱くして

・「なる」との組み合わせ

・重複語幹＋naɿ
ure: nnamakaratu [ffuf]f naɿ.これはいまからゾ黒くなる。
u[rikatu ffuff naɿ] pakɿ.これが黒くなるはず。これから黒くなると思う。
unu] fa:ja mmapi u[puupu] naɿ kumata.この子はもっと大きくなる。
upuupu]na:[tu] nari:ɿ.大きくなっている。木などが複数本
imiimi utaɿ] majunutu [upuupu] nari:ɿ.小さかったネコが大きくなっている。
ffu:ffu utaɿ] karakɿnu[tu ssu:ssu] nari:ɿ.黒かった髪が白くなっている。

unu] maju[: imi] maju jatassukatu [upuupu] nari:ɿ.この猫は小さい猫だったけど、大きくなっている。

・「なす」との組み合わせ＞＞重複語幹ではでなかった。
upuf] nase:ɿ.大きくしてある。畑を開墾して。
upuftu] nase:ɿ.大きくしてある。畑を開墾して。

２．連体用法

形容詞の修飾－被修飾の組み合わせにはいくつかのパタンがある。どの組み合わせにも、単語幹によるものと重複語幹によるものがある。

もっとも単純なのは修飾－被修飾という２単語の組み合わせであるが、これにも nu 格の有無でパタンが異なる。ほかに、「＜ある属性を持つ部分＞を持つ全体」という３単語の組み合わせもある。こちらも、nu 格の有無や語順の違いでいくつかのパタンがみられる。

属性のあらわれ方には２つのパタンがみられる。形容詞が単語幹であらわれる場合と、重複語幹が nu 格であらわれる場合である。重複語幹がつねに nu 格であらわれるということは名詞性が強いことのあらわれだろう。

部分をふくむ３単語の組み合わせでは、部分がハダカであらわれる場合と nu 格であらわれる場合とがある。

その結果、２単語の組み合わせに２パタン、３単語の組み合わせに８パタン、あわせて１０のパタンがみられるが、形容詞の重複語幹はこのなかの４パタンにあらわれる。

大神方言ではカリ型の形容詞も規定語になることができるが、非過去テンスでよりふつうに使用されるのは単複の語幹形のほうである。

utakaɿ] ita: muti ku:.厚い板を持ってこい。
ivkaɿ] issu muti ku:.重い石を持ってこい。
piskaɿ] ita: muti ku:.薄い板を持ってこい。

uta] ita:] ne:N.厚い板はないよ。
iv] issu muti ku:.重い石を持ってこい。
mme]pi:[ma] pis itau muti ku:.もう少し薄い板を持ってこい。
aka] pananutu] saki:ɿ.赤い花が咲いているよ。×akakaɿ pana

utautanu] ita: muti ku:.厚い板を持ってこい。
akaakanu] pananutu] saki:ɿ.赤い花が咲いているよ。×akakaɿ pana

過去テンスの規定語でもカリ型の形容詞が使用されるが、語幹形との比較におけるあらわれやすさについては未確認。

sakɿN] fau[taɿ] mmaka[taɿ] ka:s[su] muti ku:.さっき食べたおいしかったお菓子を持ってこい。
mmaffa] ne:ta[taɿ] piNta[nu] su:nusnu[tu] jatuf[fau] iriri[pa mmaf] nari.おいしくなかったヤギ汁がヨモギを入れたらおいしくなった。
a: [maiNtu ja:skataɿ pa:Nnu kutu: umui i]tasi.まえにひもじかった時のことを思い出した。形式名詞
su:nus[nu] mmaka[taɿ] munu:[tu umu]iti.汁がおいしかったことを思い出した。形式名詞

２．１　２単語の組み合わせ

重複語幹 nu＋全体

重複語幹の非過去形　akaaka=nu の形をとる。

人
taka:takanu] pStu 背の高い人
umus[su:]umussunu pStu 面白い人
ja[pa:]japanu pStu やさしい、親切な人
ja[ri:]jarinu pStu ダメな人、悪い人
tau:]tau[nu] pStu いい人、上等な人

〇ma:nu taka:takanu pStu とても背の高い人
〇mmapi] taka:taka[nu] pStu もっと背の高い人

動物
ssu:ssunu] in 白いイヌ、真っ白なイヌ

もの
pukara[sɿ:]pukaras[nu] panassu:[tu] kSski.うれしい話を聞いた。
ure:] pukuru:pukuru[nu] mikɿ.これは冷たい水だよ。
mai[ja taka:takanu] jama jatassuka[tu] nnama: [pɿtaf] nari:ɿ.まえは高い山だったけど、いまは低くなっている。
kapasɿ:]kapasɿnu kata.とてもいい匂い。

連体重複語幹の過去形
　連体重複語幹の過去形は nu 格ではなくハダカで補助動詞 uɿ（の過去形の utaɿ）とくみあわさる。
imiimi utaɿ] majunutu [upuupu] nari:ɿ.小さかったネコが大きくなっている。
marumaru utaɿ ki:nu jutanutu unakina:N na]ri:ɿ.短かった木の枝が伸びて長くなっている。
ffu:ffu utaɿ] karakɿnu[tu ssu:ssu] nari:ɿ.黒かった髪が白くなっている。
maija] jari:jari utaɿ pStunu[tu] zjo:to:N nari:ɿ.まえはダメだった人が良くなっている。

akaaka u[taɹ pStu]nu[tu] n[nama:] naupasi nari:ɹ? （むかし顔が）赤かった人がいまはどうなっているか？
pa[ka:paka utaɹ pStu]nu[tu] ui pS[tuN] nari:ɹ.若かった人が年寄りになっている。

pa[ka:paka utaɹ pStu はいいが、～jataɹ pStu は不自然。重複語幹はあくまで形容詞であって、意味的にまで名詞的ではないからか。しかし、カリ型に使用された形容詞的な aɹ ではなく、動詞的な uɹ である。

単語幹＋全体

人
ju:ka:] pStu 力のない人、弱い人
paNta] pStunu mmi パンタ] pS トゥヌ ンミ 忙しい人たち
pakaski] pStu 面白おかしい人
me:s] fa: おとなしい子ども
taka] pStu 背の高い人
pe: pS[tu:] vvemas[ki] munu.速い人はうらやましい。足が。
paukuri] pStu 気が荒い人
au] pStu 顔の青い人

〇mu:tu] ju:ka: pStu すごく力のない人、弱い人
〇ma:nu] taka pStu とても背の高い人
〇mmapi taka pStu もっと背の高い人　場合によってはこれも言える。

人の部分
ma[ru] nupui 短い首
na[ka] pakɹ 長い足

動物
ssu] in 白いイヌ
kanu] nu:[ma pe:] nu:ma [ja:.この馬は速い馬じゃないかな。
kanu] nu:[ma pe:] nu:ma] pe:m.この馬は速い馬じゃないかな。
mi:kɹmi] tuɹ.きれいな鳥だ！(mi:]kɹmikam.きれいだ。)

もの
aka] paku 赤い箱
ki:[ja] kamara[sɹ] panassu:[tu] kSski.きょうは悲しい話を聞いた。
ffa] tuke 曇りの天気　暗い天気？
maija [sipa] ja:N[tu] uri:taɹ.以前は狭い家に住んでいた。

mi:kɹmi] heja きれいな部屋
ffu] kuruma.黒い車だ。

〇mme]pi:[ma] pis itau muti ku:.もう少し厚い板を持ってこい。

以下の例はかざりがヌ格なので、かざられは一語化した複合名詞とみてよい。
ma:nunu] upuami ものすごい大雨
ma:tanu] upuami ものすごい大雨

述語
終止非過去
kanu] pStunutu [upu] kui.あの人が大きい声だ。声が大きい。
ka[re:] imi kui.あの人は小さい声だ。声が小さい。
ɹaka] karakɹ[a [ffu] karakɹ.父の髪は黒髪だ。
unu] ita: [kaɹ] ita.この板は軽い板だ。
kare:] mi:kɹmi pStu.あれは体格のいい人だ。好男子だ。

終止過去
kanakaija aka pana]tu jataɹ.まえは赤鼻だった。あの人は。
ike:]m[na] upu ki:[tu] jataɹ.むかしは大きな木だった。

あだな：一語化して固有名詞になる。
aka]pana 赤鼻。子どものころの隣家の同世代の人のあだ名
jav[vi]fa: 怒りん坊。子どものころの話者のいとこのあだ名
na[kapakɹ] e:k!ici　長足英吉。子どものころの話者のあだ名。背が高かった。
[nakapuni 長骨。子どものころの話者のあだ名。背が高かった。

２．２　３単語の組み合わせ

重複語幹 nu＋部分＋全体

人
[naka:nakanu karakɹ mitum 長い髪の女
ure:] aka:aka[nu] mipa[na] pStu.これは赤い顔の人だ。

動物
ffu:ffunu] pani tuɹ 黒々した羽の鳥、黒々の羽鳥
naka:nakanu pɹki] maju 長いひげのネコ

もの
a[kaakanu] fta paku 赤い蓋の箱、赤々の蓋箱
fka:fka[nu] suku fkuru 深い底の袋

過去形
ure:] akaaka[nu] mipana pStu[tu] jataɹ.これは真っ赤な顔の人だった。述語
a[kaakanu] mipana [jataɹ] pStu 真っ赤な顔だった人。部分＋コピュラ
akaaka utaɹ mipana pStu 真っ赤だった顔の人。重複語幹＋補助動詞
akaaka jataɹ mipana pStu 真っ赤だった顔の人。重複語幹＋コピュラ

単語幹＋部分＋全体

人
ike:]mn[na aka mipana] pStu jatassuka[tu na]uri:ɹ.むかしは赤鼻人だったけど治っている。
naka karakɹ] pStu 長い髪の人、長髪人
kare:] kaki kɹmu pStu.あれは心のきれいな人だ。
ma:ku] mikani pStu 丸いメガネの人、丸メガネ人
ure: naka ikɹ pStutu] jata:ɹ.あれは息の長い人・息を長く止めていられる人だった。潜りで。

〇ma:nu aka] mipana pStu.とても赤顔人。とても顔の赤い人。とても赤い顔の人。
〇ma:nu] ti: naka pStu とても手の長い人

動物
maru tu:] maju 短いしっぽのネコ、短しっぽネコ
ffu pani] tuɹ 黒い羽の鳥、黒羽鳥
naka pɹki] maju 長いひげのネコ

もの
a[ka fta] paku 赤い蓋の箱、赤蓋箱
aka pa:] ki: 赤い葉の木、赤葉木
maru i:] ɹaranu[tu aka] ɹara.短い柄の鎌が私の鎌だ。
unu naka i: ɹara: saburo:ka ɹa]ra? この長い柄の鎌は三郎の鎌か？

過去形
aka] mipana pStu[tu] jataɹ.赤い顔の人だった。赤顔人だった。きれいな言いかた。述語
aka] pana pikitum[tu] jataɹ.赤い鼻の男だった。
na[ka] kara[kɹ] ja[taɹ pS]tu 長い髪だった人、長髪だった人　部分＋コピュラ

a[ka fkɹ] ja[taɹ pS]tu 赤い口だった人
a[ka fku] ja[taɹ pS]tu 赤い服だった人
aka] mipana [jataɹ] pStu 赤い顔だった人。赤顔だった人。
[naka karakɹ asi:[taɹ] pStu 長い髪をしていた人　部分＋シテイタ

重複語幹 nu＋部分 nu＋全体

akaaka[nu] mipana[nu] pStu 赤い顔の人
na[ka:nakanu] karakɹ[nu] pStu 長い髪の女
　　ma:nu naka:nakanu karakɹnu pStu とても長い髪の女

過去形
naka:nakanu] karakɹ ja[taɹ] mitum 長い髪だった女　部分＋コピュラ
akaakanu] pana jataɹ pStu 赤い鼻だった人　いまは治っている。
akaakanu] pana a[si] utaɹ pStu 赤い鼻だった人　部分＋シテイタ
naka:nakanu] karakɹ asi:[taɹ] mitum 長い髪だった女
　　×赤い鼻だった人　akaakanu] pana ★utaɹ pStu　★utaɹ 不可

単語幹＋部分 nu＋全体

部分 nu の nu はいえるが、ないほうがより自然かもしれない。

人
]naka karakɹnu pStu 長い髪の人、長髪の人
ma:ku] mikani[nu] pStu 丸いメガネの人、丸メガネの人
a[ka fkunu pStu 赤い服の人
jari] fkunu pStu 汚い服の人、ダメ服の人
k!icigi] fkunu pStu きれいな服の人、きれい服の人

　　○ma:nu naka karakɹnu pStu とても長い髪の人、とても長髪の人

動物
naka tu:nu] maju 長いしっぽのネコ

もの
aka ftanu] paku 赤い蓋の箱

部分＋重複語幹 nu＋全体

suku] fka:fka[nu] fkuru 底が深い袋
ti:] upuupunu pStu 手が大きい人★簡単な言い方ならこれでもいい。
pakɹ] pe:pe:nu fa:.足の速い子ども★簡単な言い方ならこれでもいい。
　　pana akaakanu pikitum 鼻の真っ赤な男★簡単な言い方ならこれでもいい。

もしこのタイプが少ないとしたら、重複形が名詞的なのでその前の名詞がヌ格になるのを基本とするからか？

連体重複語幹過去形　未確認

部分＋単語幹＋全体

「部分 nu＋単語幹＋全体」型のほうが詳しい言い方

人
ti: naka] pStu 手の長い人
mi: jam] pStu 目が悪い人、目を病む人
pata jam] pStu 腹を病んでいる人
kɹmu kaki] pStu.心の優しい人だ。
tiN]mau[ki ta]u[kɹ] pStu 金儲けのうまい人
kɹ:] taukɹ pStu 字が上手な人
kɹ:] tau[kɹ] pStu jataɹ.字が上手な人だった。

〇ma:nu] ti: naka pStu とても手の長い人

動物
pani f]fu tuɹ 羽が黒い鳥
pɹki naka] maju ひげの長いネコ

もの
saki] jastai] maqcja 酒が安い店
　　sakinu] jastai] maqcja 酒が安い店

連体形過去形
ti:nu] nakaka[taɹ] pStu 手の長かった人
カリ型だとハダカではなくヌ格のほうがいい。
　　ti: nakakataɹ pStu 手の長かった人　簡単な言い方

動詞の連体形＋単語幹＋全体
ske:s] niv pStu 走るのが遅い人
aɹkɹ] pe: pStu　歩くのが速い人
fau pe:] pStu 食べるのが速い人
kFf] taukɹ pStu 作るのが上手な人、作り上手人
munu fau pe:] pStu ものを食べるのが速い人　★名詞は対格にならない。
　★ske:si] pe: pStu　走るのが速い人

・動詞の連体形★ske:s=nu はまあまあ。そんなに変ではない。
ske:snu] niv pStu 走るのが遅い人
aɹkɹ[nu] pe: pStu 歩くのが速い人
aɹkɹ[nu] niv pStu 歩くのが遅い人

ske:s] nivka[taɹ] pStu 走るのが遅かった人
munu fau] pe:ka[taɹ] pStu ものを食べるのがはやかった人　★名詞は対格にならない。

部分 nu＋重複語幹 nu＋全体

人
karakɹnu] naka:nakanu pStu 髪の長い人、髪の長々の人
ti:[nu] upu:upu[nu] pStu 手の大きい人
mipana[nu] aka:aka[nu] pStu 顔が赤い人
mipananu auau]nu pStu 顔の青い人
pakɹnu] pe:pe:nu fa: 足の速い子ども
pananu] akaakanu pikitum 鼻の真っ赤な男

動物
tu:nu] naka:naka[nu] maju しっぽの長いネコ
mimnu ffu:ffunu] in 耳が黒いイヌ
pakɹnu naka:nakanu tuɹ 足の長い鳥

もの
ftanu aka:akanu] paku 蓋が赤い箱
u[nu] ki:[ja] pa:[nu] aka:akanu [ki:.この木は葉が赤い木だ。
pakɹ[nu] maru:maru[nu] tai 足の短い台
sukunu] fka:fka[nu] fkuru 底が深い袋

過去形 =nu＞utaɿ/jataɿ
mipananu aka:aka utaɿ] pStu 顔が赤かった人　重複語幹＋補助動詞
pa[kɿnu] pe:[pe:] u[taɿ] fa:.足の速かった子ども。
pɿkinu] ssu:s[su] utaɿ pikitum ひげが白かった男
ti:[nu] upuu[pu] utaɿ pStu 手が大きかった人
ti:nu] upuupu jataɿ pStu 手が大きかった人　重複語幹＋コピュラ
pakɿnu] pe:pe: ja[taɿ] fa: 足の速かった子ども
pananu] akaaka ja[taɿ piki]tum 鼻の真っ赤だった男

部分 nu＋単語幹＋全体

　このタイプの「手の長い人」は、「Anu BC」であるので、外形的には「Anu/BC」のように分析することができそうだが、BC の「長い人」だけでは意味をなさない。したがって、BC を一語化しているとみることはできず、「Anu」も含めて一語化したとみることはさらに困難だろう。したがって、このタイプは 3 単語の組み合わせとみるべきである。

〇ti:nu] ma:[nu naka] pStu 手がとても長い人
〇ma:nu] ti:nu naka pStu とても手が長い人
　　〇ma:nu karakɿnu naka pStu.とても髪の長い人。

人
fkunu] jari pStu 服の汚い人、服のダメ人
ti:nu] na[ka] pikitum 手の長い男
kɿ:nu] tau[kɿ] pStu 字が上手な人
ti:[nu] upu pStu 手の大きい人
pakɿ]nu pe: pStu.足の速い人。
ske:s]nu pe: pStu.走りの速い人。
kɿ:nu] tau[kɿ] pStu 字が上手な人
pa[kɿnu] pe: fa:[tu] jataɿ.足の速い子どもだった。

動物
tu:nu] maru maju しっぽの短いネコ、しっぽの短ネコ
tu:nu] ssu in しっぽの白いイヌ、しっぽの白イヌ
paninu ffu] tuɿ 羽の黒い鳥、羽の黒鳥
tu:nu] naka maju しっぽの長いネコ
mimnu ffu] in 耳が黒いイヌ

もの

ftanu] aka paku 蓋が赤い箱
pa:nu] aka ki: 葉が赤い木、葉の赤木
pakɿnu] maru tai 足の短い台
ni:nu] cu: ffa 根の強い草　むしりにくい草
pananu] aka pikitum[tu] jataɿ.鼻の赤い男だった。

sakinu] jastai] maqcja 酒が安い店

３．中止用法

３．１　ふたまた述語文の先行する述語

文中の一つの主語に対する複数の形容詞述語のうち、先行する述語が重複語幹で従属節になる。

naka:naka kupa]kam.長くて硬い。簡単な言い方。
naka:naka[tu kupa]kaɿ.長くて硬い。tu をいれると詳しい言い方になる。
kupa:kupatu] nakakaɿ.硬くて長い。
iv:ivtu] utakaɿ.重くて厚い。
ure:] kaɿ:[kaɿ] imikam.これは軽くて小さい。
ure:] imii[mi] kaɿkam.これは小さくて軽い。簡単な言い方。

重複語幹が補助動詞 uɿ とともに先行する述語として使用される。

iv:iv] uri:ri[tu] utakaɿ.重くて厚い。＜uri uri
iv:[iv] uri: s!iti:[tu] utakaɿ.重くて厚い。
naka:naka] uri s!iti:[tu] kupakaɿ.長くて硬い。

つぎの例では、意味的に原因理由の関係（状況語的）になっている。

unu] pasanaɿ[a] akaaka [pirumas]kikaɿ.このバナナは赤くて珍しい。
akki] akaaka [pirumas] munu.あ、赤くて珍しい。
upuupu] pirumaskikatam.大きくて珍しかった。

３．２　従属節

条件節

条件的な意味を明示するために補助動詞やコピュラを使用する。重複語幹と組み合わさる補助動詞

asɿ/uɿ やコピュラ jaɿ がテンス対立のない条件形になって条件的に使用される。

aku[ma:]akuma assipatu [mma]kaɿ.甘ければおいしい。甘くすれば。
amaa[ma] ure: mmaf[fa] ne:N.薄味だとおいしくない。
iv:iv] urapa[mai] mutaitu sɿ.重くても持てるよ。
amaa[ma] uti[ka:] mmaffa ne:N.薄味ならおいしくない。
amaa[ma] jati[ka:] mmaffa ne:N.薄味ならおいしくない。

重複語幹のみで条件的に使用されることもある。＜ふたまた述語文の先行する述語＞の用法とは意味関係の違いで区別されるか。

kara:karatu] mmakaɿ.辛ければおいしい。辛いとおいしい。唐辛子
akumaakumatu] mmakaɿ.甘いとおいしい。砂糖

接続形

重複語幹と組み合わさる補助動詞 uɿ やコピュラがテンス対立のある接続形になる。

iv:iv] uri[pa] mutaiN.重いから持てないよ。補助動詞
kaɿ:kaɿ uri[pa] mutaitu sɿ.軽いから持てるよ。
ure: kaɿ:kaɿ] uri[pa] imikam.これは軽いから小さい。
iv:iv] uri:ripa[tu] utakaɿ.重いから厚い。＜uri uripa
upuupu] jassuka[tu] kaɿkaɿ.大きいけど軽いよ。コピュラ
imiimi] jassuka[tu] ivkaɿ.小さいけど重いよ。

過去形
iv:iv] utaipa[tu] us[ki kSs]taɿ.重かったから置いてきた。
iv:iv] utaipa[tu] muta[ta] kSstaɿ.重かったから持たないできた。置いてきた。

３．３　修飾語

重複語幹がそのままで修飾語（どんなふうに）になって述語動詞を飾る。
日本語の「料理をきれいに食べた」「制度を大きく変えた」のように本来の形容詞的語彙をうしなって副詞化するような用法は、いまのところ確認されず、基本的には形容詞語彙をかなりの程度に保っている。（この点での文法化－動詞や形容詞からの副詞化－はすすんでいない。）

uriNkuija] pe:pe:ja] ske:saiN.これ以上ははやくは走れない。
ki:[ja] pe:pe:[tu] uki.今日ははやく起きた。

nuka:nuka] numi.ゆっくり飲め。
karakɿnutu] na[ka:]na[ka ui] uɿ.髪が長く生えている。伸びている。
mmapi] naka:naka [kaki.もっと長く書け。
mmapi] upuupu] ka[ki.もっと大きく書け。
aNsi] ma:[nu] upuupu ka]kSna.そんなにとても大きく書くな。
mma[pi] amaa[ma fau]puskam.もっと薄味で食べたい。
mma:]mmatu fai.おいしく食べた。
mma:mma] fai.おいしく食べた。簡単な言い方。
a[ra:] ja[ri]jariti:[tu] na[ra]pe:ɿ.私はだめにならべてある。

一語性について

単語幹に、以下の第１例のような組み合わせがあって、その一語性が問題になる。あだ名的に使用されることもあるので一語性がないとはいえないが、第２例のように程度の修飾語が形容詞をかざりうることから、２単語または３単語の組み合わせそれ自体が一語的になるわけではない。第３例のように３単語の組み合わせで前の２要素が意味を変えずに入れ替え可能（部分の名詞は nu 格になる）である点も一語性を支持しない要素になる。（★西表方言でも同様）第４例のような重複語幹の３単語の組み合わせでは重複語幹が nu 格になるのが義務的なので、一語性はより問題にならないだろう。

１．aka] mipana pStu 赤い顔の人。赤・顔・人。
２．ma:nu aka] mipana pStu とても赤い顔の人。とても赤・顔・人。
３．mipananu] aka pStu 顔の赤い人。顔の赤・人。
４．aka:akanu] mipana pStu 赤い顔の人。赤い顔・人。

４．宮古語他方言、他の琉球諸語の例

宮古語狩俣方言

大神島ともっとも距離的に近い対岸の狩俣地区の方言にも重複語幹がある。

〇佐渡山正吉(2014)『狩俣方言の世界』
若々しい　バカーバカ。述語
忙しさを強調する語　パンターパンタ。述語
うすっぺらな紙　ピスーピスヌ カビぃ。
低いことを強調するとき　ビぃダー ビぃダ　述語？
広い　ひろびろと　ピスぅーピスぅ。（金田：これは修飾語か？）
長い物　ナガムヌ。
長いを強調する言い方　ナガーナガ。述語

長い糸　ナガーナガヌ イト。規定語

宮古語伊良部方言

○富浜定吉(2013)『宮古伊良部方言辞典』
　資料編の二．文法「４．形容詞の活用形」では伊良部島を４地区に分けて例をあげる。そのなかの「畳語」（重複語幹）の欄に用例が多数あり。(p.847)

○下地理則(2018)『南琉球宮古語伊良部島方言』
　伊良部方言の重複語幹に関する記述は以下のとおり。
cɨmu+kagi>cɨmukagii+cɨmukagi 心清らかな
uku+naga>ukunagaa+ukunaga 大きくて長い
jana+cɨmucɨ>janacɨmucɨi+janacɨmucɨ 性悪な 以上 pp.88-89
名詞の例：avva>avvaa+avva 油っぽい p.92
ciccjunu [akaa-aka]=du ur-Φ「月が明るくしていた。(直訳：月が明々っていた。)」p.212（金田：補助動詞が非過去形なので「月が明るくしている。」が正しい。）

宮古語池間方言

　池間方言は池間島とそこからの分村である伊良部島の佐良浜地区（近世中期に分村)、宮古島の西原（西辺）地区（明治初期に分村）で話される方言である。これまでの報告では池間方言には重複語幹がないとされてきた。

○林由華(2009)「琉球語宮古池間方言の談話資料」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』1:153-199
　池間方言圏である宮古島の西原（西辺）地区の調査結果として「宮古諸方言全般にみられる重複(reduplication)による形態法を、池間方言は持っていない」とする。(p.178　脚注 15)

○富浜定吉(2013)『宮古伊良部方言辞典』
　資料編の二．文法「４．形容詞の活用形」では伊良部島を４地区に分けて例をあげる。そのなかの「畳語」（重複語幹）の欄には「畳語の用法は佐良浜方言にはない」とある。(p.847)富浜定吉(1929-)

　池間島在住の伊良波盛男氏（78 歳 1942-）に確認したところ、池間島に住んでいた中学時代（65 年前後以前）まではふつうに池間の方言を使っていたが、高校から宮古島に移ったので、それ以降は池間の方言をあまり使わなくなった。母親の伊良波ハチさん夫婦は盛男氏を産んでから、盛男氏を自分の両親に預けて島内の別の家に住んでいたため、盛男氏は祖父母を両親代わりにして育った。そのため、盛男氏の方言は基本的に育ての親である祖母の山城メガサラさんの方言を受け継いでいるという。
　伊良波(2018)によれば、母である伊良波ハチさん[ニガインマ：祈願母]（97 歳 1924-）もムヌスー（巫

女・神女、沖縄でいうユタ)、その母である伊良波氏の祖母山城メガサラさん（1902-1980）もとても有名なムヌスーだった。(伊良波盛男 2018『わが池間島(改訂版)』p.36)

以下の例は伊良波盛男氏からの電話での聞き取り（20210526）による。

imiimi]ga[mai.小さいね。小柄だね。小さい人に対して。gama は指小辞。
ka[ria imiimi]gama [do:.あれは小さいよ。小柄だよ。小さい人に対して。gama は指小辞。
u[nu] wa:ja [mma:]mma.この豚はおいしい。食べたあとで。
　ku[nu] wa:ja [mma] munu.この豚はおいしい。食べたあとで。
siNsi:]ja ba[ka:]baka: [i:.先生は若々しいねえ。おもに男に対して。若い人には言わない。
　siNsi:]ja ba[ka] munu [i:.先生は若いねえ。
　ba[ka]kai[ba unu skama]: [daizjo:]bu [jo.若いからこの仕事はだいじょうぶだよ。

これまでのところ確認できた（自発的に思い出せた）のは以上の 3 語彙のみであって、池間方言で重複語幹の使用がもはや死語化しているのは確実だが、かつては池間島でも形容詞の重複語幹が使用されていたことが推測できる。池間島のなかでは、少なくとも山城メガサラさん世代が存命のいまから 40 年ほどまえまでは使用されていた、とみてよいのではないだろうか。

一方で、西原（西辺）地区でも佐良浜地区でも「重複(reduplication)による形態法を、池間方言は持っていない」「畳語の用法は佐良浜方言にはない」という記述をみると、池間島からの分村では重複語幹がより早い時期に失われていたという可能性も考えられる。

なお、林(2009)の話者は西原（西辺）地区の 2007～2008 年調査当時 88 歳の女性である。この女性は存命であれば現在百歳あまりになるので、伊良波氏の祖母よりも一世代ぐらい下の世代になる。

追記（20210530）：

上記の情報をきっかけに、狩俣繁久氏が池間島における 1989 年 3 月の形容詞調査票（琉球列島の言語の研究　第 4 次調査票　沖縄言語研究センター　1988）を探し出してくれた。そこには 1915 年生まれの話者（女性、調査時 74 歳、両親ともに池間出身）による重複語幹の例（135 項目中 16 項目、15 語彙）があり、その多くに～munu 型の語形が併記されていた（このうち、伊良波氏の語彙と重なるのは「おいしい」のみ)。調査票の中には～munu 型の語形だけのところも多数あって、そこにも重複語幹の存在の可能性が残されている。このように、32 年前の調査時点で池間島では形容詞の重複語幹の使用がめずらしいものではなかったことがうかがえる。

なお、池間島は宮古諸島の最北端、大神島はその少し手前と、距離的に近い関係にある（直線距離で 5 キロほど）が、形容詞調査票の語彙自体にも大神方言と共通するところが多くみられ、その点でも二つの方言はかなり近い関係にあることがわかる。ただし、調査票をみるかぎり、大神方言の形容詞終止用法ではカリ型と単複の語幹形がよく使用されるのと違って、池間方言では～munu 型を中心に重複語幹も使用されるというタイプのようである。そのあたりの確認作業も今後おこなっていきたい。

★池間調査の話者について：伊良波氏によれば、話者は戦後 7 代目のフヅカサ（フンマ）を務め、ミャークヅツの中心的な歌い手だったという。

八重山語西表方言

○『言語学大辞典セレクション琉球列島の言語』「八重山方言」（石垣方言）
　文法の 5)副詞に「形容詞の語基を重ねたものに、接尾辞-si を付けてできたもの」の例をあげる。p.412

○前大用安(2002)『西表方言集』
アハアハーシ　ahaaha:si　あかあかと　赤赤（と）　ひじょうに赤く見えるさま
カルカルシ　k!aruk!arusi　かるがると　軽々と　非常に軽い様
ミヌサーミヌサーシ　minusa:minusa:si　こわごわ　恐々（と）　恐がりながら物事をする
ザラザラーシ　zarazara:si　こんこんと　滾々　水がどんどんわき出てつきない様子
ンバンバシー　NbaNbasi:　しぶしぶ　渋々　気が進まずいやいや
ンバンバシー・シグトゥバ・ス　NbaNbasi: sigutuba su　渋々仕事をする　渋々仕事をする
ピサーピサシ　p!isa:p!isasi　たいらな　坦々な　土地や道路が平らな様
ナーナーシ　na:na:si　ながながと　長々と　長いさま
クマグマシ　k!umagumasi　ほそぼそと　細々（と）　細かい様
アガヨアガヨーシ　agajoagajo:si　もんもん　悶々　悶えて苦しむ様子
ラクラクシ　rakurakusi　らくらくと　楽々と　気楽な様

・規定語～シヌ＋名詞
ピサーピサーシーヌ・ミチナ　p!isa:p!isa:sinu mic!ina　坦々とした道路　平らな道　p.207

八重山語波照間方言

ma:ma]si [skuriba.おいしく作れ。
ma:ma]si [skurja]N.おいしくできた。作った。
　　[mahaN. おいしい

○麻生玲子（2020）「南琉球八重山語波照間方言の文法」（博士論文）
6.6.2 重複
naaha「長い」に関連して naanaa「とても長く」、pesjaha～peesjaha「早い」に関連して peepee「とても早く」、piisjaha「寒い」に関連して piipii「とても寒く」がある。2 音節語の PC 語幹に関しては、takaha「高い」に関連して takaataka「とても高く」、pikoha「気を付ける」に関連して pikopiko「とても気を付けて」、maroha「短い」に関連して maromaro「とても短く」、acaha「厚い」に関連して acaaaca「とても厚く」、kumaha「細かく」に関連して kumaakuma「とても細かく」がある。

日本語

日本語では語彙が限定され、用法も修飾語になるのが基本。

軽々（と)、長々（と)、ほそぼそ（と)、こまごま（と)、こわごわ（と)、やすやす（と)、高々（と)、赤々（と)、白々（と)、黒々（と)、青々（と)、・・・
ひろびろと（する)、
熱々／アツアツ（の・だ)、・・・
うすうす（気づいている)、・・・
たかだか（この程度：評価副詞・陳述語)、

「〜しい」の形で形容詞になる。

重々しい、荒々しい、弱々しい、憎々しい、若々しい、しらじらしい、すがすがしい、・・・

・・・